

# 2011年5月12～15日 東北被災地訪問日誌 そして、みんながひとつになった

八柳卓史



5月12日 木曜日

東北新幹線の郡山駅前に集結、遠くは沖縄から3人、兵庫から3人、名古屋から3人、大阪から2人、東京から3人の、総勢18人のメンバーであった。

午後すぐに、JDF被災地障害者支援センター福島を訪問し、白石代表から支援の取り組みを聞き、JDFは障害者権利条約を機に日本の障害当事者団体のほとんどがあつまった組織で、DPI日本会議なども入っている団体。



障害被災者の安否確認、物資の配布などを行っているとのこと。

避難所には障害者が非常に少なく、入所施設に強制的に入れられている状況もあるのではとのことだった。

支援する人も被災者が多く、放射能の問題も含めて将来への不安が大きいことを感じた。最後に白石さんから、仮設住宅が非常にバリアブルなので、みんなでバリアフリー住宅の申し入れをして欲しいと要望が出された。

13日 金曜日

午前中、あえるの会のたいむILを訪問、デイサービスとらか生き場づくりの取り組みで、若い障害者の仲間のつながりを大事にしているようだった。

午後、南相馬市に向かう途中飯館村を通ると、持参したガイガーカウンターの数値は7マイクロシーベルトを超える線量を示す。

南相馬市では、青田所長から、津波を受けて被災した沿岸部を案内される。近くにあった特別養護老人施設は、津波の到達点からわずか30メートルくらい入ったところ

で被災し、100名ぐらゐの高齢者が流されたと聞く。前は家並みや木々で海が見えなかつた所だつたが、今は薄茶色だけの荒野となし、くちゃくちゃになつた自動車が並んでいる。

次に漁師町のあつた島崎地区に行く。こゝも、薄茶色一色の世界。ところどころにベニヤ板に赤丸マークが書いてある。住民が見つけた遺体発見現場の印だ。土台ごと流された家の跡。漁業協同組合の建物の1.2メートルぐらゐの柱が、折れまがって、鉄筋がねじまげられて倒れている。すごい津波の力だ。この地区で唯一原型を留めた島崎公民館の屋上では、避難した住民が、波に飲まれて行つたといふ。

放射能の危険のためか瓦礫の整理も屋々として進んでいない。



ぴーなつぷに戻り、青田さんからこれまでの様子を聞く。南相馬市は福島原発から30キロ圏内にあり、自主避難と自宅内待機が指示され、7万人のうち6万人が避難したが、残された万人は、高齢者や障害者世帯が多かつた。自宅内待機をしても、買物もできず、救援物資もまったく届いてこなし、本当に見捨てられたような気持ちがあつたといふ。青田さんは、残された人からの電話での依頼

などが毎日のように入り、結局居続けたのだと語つていた。自己責任という言葉の恐ろしさを感じた。

この日の夜、名取市の重度訪問派遣事業所ドリームゲートに立ち寄り、歓迎を受けた。

### 14日 土曜日

午後、仙台市亶理町荒浜海岸の津波被災地を車でまわる。もとは田園地域だつたのか、大きな木が根っこごと転がり、あちこちが薄茶色に染まり、家財道具の破片が散乱している。瓦礫もずたかづたか積み上げられている。

夕方、被災地障害者センターたすけつと訪問。たすけつとの建物も被災を受けていた代表の井上さんから地震当時の話を中心に聞く。現在は被災障害者の支援に廻りはじめてるが、人手が圧倒的に足りないため、更に多くのボランティアを募つてほしいとの要望が出された。外を見回すとたすけつとの前にある高層マンションの階段を多くの人が上つて行く。2ヶ月たつてもエレベーターが復旧してないのか。



にちにちようび  
15日曜日

午前中、気仙沼港の津波被災地では、海水だけ直接流れ込んだのか、ほとんどのビルが原型をとどめていた。ただ、1階部分は、すべて流されてしまっている。1000ト以上の大きな船が何隻も、道路の上にドンと打ち上げられている。僕らが入ったのは、フェリー乗り場がある一番奥のところだから、全貌はつかめていない。

午後、陸前高田市をとおって盛岡に向かう陸前高田は、すべて津波で流れ道路すら残っていない。仮設のアスファルト道が元々あった道路と関係なく作られている。今どこにどの道があるかわからなくなるくらいだった。



夕刻、盛岡市の被災地障害者支援

センター岩手を訪問する。ここは4月中旬にできたばかりの所で、代表の今川さんから現在の取り組みを聞いた。沿岸部を中心に被災障害者のヘルパー支援などを行っているが、盛岡から自動車でも3時間かかるので、遠野に第2拠点を作り、ヘルパーさんなどはそこから派遣することになったと話していた。また、社協から頼まれて、

電気炊飯器を届けたところ、障害者団体からの援助は受けたくないと断られたなどの話があった。盛岡では自立生活している障害者が圧倒的に少なく、CIL盛岡の仕事と被災地センターの仕事の掛け持ちで、毎日深夜まで仕事に追われている状況が話された。

被災地訪問最後の夜を迎え、訪問団ひとりひとりの中に、今、同じ仲間として私たちが障害者には何が出来るのだろうかという問いが頭に浮かんでいた。東北の地は、施設入所の方がまだまだ強く町を歩いていても、車いす使用者にまったく出会わなかったくらいだ。

その中で、全国から障害当事者が被災地センターに出向き支援している被災障害者宅を訪問し、障害者が地域で生きる意味を身を持って伝えて行くことが、今、必要ではなかろうかという気持ちが皆の中から湧き上がってきた。もちろん1日や2日の滞在では、見学にしかならない。

1週間以上の単位で滞在し、障害者にしかできないことをやってみようという方向がこの3日間の被災地訪問で得たものだった。

